

2020

# 国語

## 注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生の川本雄吾<sup>ゆうご</sup>は、学校での生活がバカらしくなり、二学期の後半から休みがちになった。共働きの両親はすぐに理解を示したが、その理性的で冷ややかな対応にも違和感<sup>いわかん</sup>を抱<sup>いだ</sup>いていた。二月、学校に行かず毎日公園のベンチに座っていた雄吾は廃品<sup>はいひん</sup>回収をしている「源ジイ」と出会い、仕事を手伝うようになった。ある日、源ジイが脳溢血<sup>のういつけつ</sup>で倒<sup>たお</sup>れ、入院し、雄吾はその世話をしていた。

入院二日目には、雄吾の両親も老人の見舞<sup>みま</sup>いに顔をだしている。源ジイはふたりのまえでは、雄吾のときは<sup>①</sup>別人のように話した。「すみませんです。息子さんが毎日公園にいるものだから、つい仕事の手伝いなんかをさせてしまつて。あげくの果てにこの始末です。天罰<sup>てんばつ</sup>つてやつかもしれません」

② 真治<sup>しんじ</sup>は黙<sup>だま</sup>っていたが、亜希子<sup>あきこ</sup>が口を開いた。

「いえ。うちの子もちよつと変わつていて。八坂さんの仕事を手伝うようになってから、家でもまえより明るくなつていたんです。このころちよつと変わったねつて、夫とは話していました」

源ジイは照れたように笑つたが、真治の声は真剣<sup>しんけん</sup>だつた。

「残念ですが、雄吾はまだ中学生です。アルバイトとしてつかうのも、こうして血のつながりのない八坂さんを看病するのも、どういえばいいか、適切ではないと思います。雄吾のつきそいは、息子さんがおみえになる週末まででいいでしょうか」

上半身をベッドに起こした老人は、何度もうなずいてみせた。

「わかつております。そのあとは、ちゃんと雄吾くんはお返ししますから。ご安心ください」

その場にいた雄吾は、誰<sup>だれ</sup>も自分の意見をきかないのが不思議だつた。③ 十三歳<sup>じゅうさんさい</sup>というだけで、透明人間<sup>とうめいじん</sup>にでもなつたような気がする。口のなかでつぶやいた。

「同じじゃないか」

亜希子<sup>あきこ</sup>が振り返つた。雄吾が今度ははっきりと叫んだ。

「同じじゃないかっていったんだ。どうせ公園のベンチにもどるなら、この病院の廊下の長いすに座っていても同じだよ。どっちにしても学校にはいかないんだから」

そのときベッドの老人が、腹から太い声をだした。

「おい、兄ちゃん。親御さんにそんな A をきいちゃいけない」

雄吾は三人の大人を交互に見てから、黙って病室をでていった。

(中略)

「なあ、兄ちゃん、おれと賭けをしないか」

雄吾は意味がわからなかった。

「週末まではあと三日ある。おれは死ぬほどがんばってリハビリするから、<sup>④</sup> おれが勝ったら兄ちゃんはおれのいうことをきく。負けたら、そうだな、これからもずっとおれの手伝いをさせてやる。これでどうだ」

雄吾はおかしな賭けだと思った。源ジイが勝つたらなにを自分にさせたいのだろう。老人の薄くなった頭にいった。

「いいけど、賭けの内容はなあに」

源ジイはあっさりという。

「病室から廊下の端にある便所まで、おれが自分の足で歩いていく。それができたら、賭けはおれの勝ちだ」

雄吾は <sup>a</sup> 息をのんだ。機能回復訓練は涙がでるほど苦しく、老人は何度も途中で挫折していたのである。車椅子から立ちあがることもむずかしいのに、二十メートルもある病院の廊下を歩き切れるはずがない。

「わかった」

雄吾はそういうと、やってきたエレベーターに車椅子を押しこめていった。

老人と雄吾の勝負は金曜日の夕方に決まった。前日までの三日間のリハビリでは、源ジイは手すりにもたれて立っているのが精いっぱいだった。ぶるぶると震える左足を見ると、とても老人には勝ち目があるようには見えなかった。

決戦の金曜日には、老人は身体の調子が悪いといつてリハビリ訓練を休んでしまっている。雄吾はもう賭けをやるまでもないと思っていた。別に賭けのゆくえなどどうでもよかったのである。どうせまた来週もこの病院にやってくるのだから。

黙って病室の窓から空を見ていた老人が、よしといったのは夕食が近づいた午後五時のことである。

「さあ、いくぞ」

雄吾があっけにとられていると、源ジイは毛布をまくった。

「なにをするの」

老人はいらついたような

A

調でいう。

「だから賭けだ。車椅子をもつてきてくれ。病室をでてから便所までの二十メートルだ。勝負だぞ」

源ジイの目は倒れるまえの力を取りもどしていた。雄吾は**気おされて**、ベッドの横に車椅子をつけた。浴衣のまえをあわせて、老人は椅子におりた。

「ほんとうにやるの」

「ああ。おれがどれだけがんばれるか見てろよ。全部、兄ちゃんのためだからな」

車椅子は病室をでると廊下の端に沿ってとめられた。この病院の壁には両側に手すりがついているのだ。老人は右手で手すりをつかむと、ゆっくりと立ちあがった。左腕と左足が震えていた。しびれるように冷たく痛むのだと、雄吾はきかされたことがある。

源ジイはゆっくりと左足をひきずりながら、歩き始めた。廊下の先にある窓のなかに夕日が沈んでいく。病院の白い廊下はさしこむ夕日で床も壁も天井も、赤く照り映えていた。赤い光りは廊下を越えて、窓の外まで続いている。住宅の屋根やマンションの屋上が沈む太陽の光りを浴びて、ひと筋の夕日へ続く道のように見えた。

あたたかな光りのなかを、老人は歯をくいしばって歩いていた。廃品回収の軽トラックほどのじりじりとした速度だった。雄吾はいつ源ジイが腰を落としてもいいように、車椅子を押しながらあとを追っている。

半分ほどすすんだところで、老人は立ちどまった。肩で B をし、額を壁に押しつけて、なんとか倒れないようにしているようだ。

雄吾はいった。

「もう無理しなくてもいいよ」

「うるさい。最後までやらせろ」

壁にもたれた身体を正面にむけるだけでも、大儀そうだった。それでもなんとか右足を一步まえにだした。

「でえじょうぶだぞ、手なんかだすんじゃねえぞ」

老人はまた足をひきずり、夕日の廊下を歩き始めた。最後の十メートルをすすむために、老人は途中で三回の休みをいれた。最後の休息

では右腕一本だけで手すりにぶらさがる恰好になり、ほとんど腰が砕けたようだった。

「なさけねえなあ」

源ジイは自分を笑ったようだった。ふとももをふるわせながら、そこから腰をゆっくりとあげていく。ようやく立ちあがり壁にもたれると、  
B を整えていった。

「ちゃんと見てろ。ほんの何メートルか歩くだけで、おれはもうふらふらだ。みつともなくて、だらしないだろ。いつも兄ちゃんがいった『バカらしい』って、こういうやつだ。だがな、人間、どんなにバカらしくても、やらなきゃならねえこともあるんだ」

老人は手すりを伝うように、身体をななめにしてじりじりと前進を始めた。夕日は半分ほど東京のぎざぎざの地平線に沈んでいる。目に痛いほどの赤さだった。手を伸ばせばトイレの扉に届くところまできて、老人は背中越しにいった。

「雄吾、約束覚えてるな」

車椅子を押しながら、はいと雄吾は返事をした。涙で声が揺れないようにするのが精いっぱいだった。源ジイはいった。

「おれが兄ちゃんにやってもらいたいののは、ただひとつだ。おれの看病でも廃品回収でもなく、そろそろ中学校にもどってくれ。兄ちゃんの親御さんはインテリで、なにか理屈があるのかもしれないが、やっぱり学校は大切だ。兄ちゃんは頭だつていいし、やさしいところもある。きちんと中学にいったら勉強しろ。おれみたいになっちゃだめだ。ちゃんと勉強して、おれよりえらくなってくれ。世間を広く見て、おれやうちの息子より、立派な人間になってくれ」

源ジイはそういって、最後の一步を足をひきずりながらすすんだ。男子便所の青い扉に指先がふれると、その場にへたりこんでしまう。雄吾はもうなにをしているのか、自分でもわからなくなっていた。⑤ 泣きながら、老人を抱き起こし、車椅子に座らせる。

夕日が沈む窓のまえの長いすまで老人を押すと、雄吾は長いすに腰をおろした。ふたりは同じ夕焼けにむかって座った。源ジイはいう。  
「来週から中学にちゃんといくんだぞ。きつかったら、休んでもいいけど、またちゃんと学校にもどるんだ。約束だからな」

雄吾は涙をぬぐっていった。

「でも、そうしたら源ジイはまたひとり切りになる。身体だつて不自由なのに」

「だいじょうぶだ。こっちはなんとでもなる。雄吾がいったバカらしさな、あれは大人だつてみんな同じように思ってるんだ。でも、そのバカらしさに正面から反対するのも、バカらしい。みんな、どこかで無理して、まわりに調子をあわせてるんだぞ。兄ちゃんもちょっとは大人のふりをしてみな」

全身にあたる夕日は穏やかなあたたかさを残してくれた。⑥ 窓の外に広がるひとつひとつの建物に、それぞれの暮らしがあるのが不思議だった。

(石田衣良『夕日へ続く道』による)

問一 波線部 a～c の言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

a 息をのんだ

- ア 驚いて息を止めた  
イ 深いため息をついた  
ウ 緊張のあまり息を吸った  
エ 恐怖で息ができなかった  
オ 突然息をするのを忘れた

b 気おされて

- ア 相手の態度に動揺して  
イ 相手の勢いにおされて  
ウ 相手の言動に驚いて  
エ 相手の雰囲気感動して  
オ 相手の言葉にいきどおって

c みつともなくて

- ア あつかましくて  
イ 腹立たしくて  
ウ 似合わなくて  
エ 見苦しくて  
オ かなしくて

問二 空欄A・Bに入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。(同じ記号には同じ語が入ります。)

問三 傍線部①「別人のように話した」とはどのような話し方ですか、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 威厳いげんに満ちた堂々とした話し方
- イ 冷たく他人ごとのような話し方
- ウ 偉えらそうで人を見下した話し方
- エ おどおどして不安そうな話し方
- オ かしこまった丁寧ていねいな話し方

問四 傍線部②「真治は黙っていたが、亜希子が口を開いた」とありますが、この時の「亜希子」と「真治」の違いを説明したものとしてみっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 亜希子は息子の世話をしてくれた源ジイを認めているが、真治は息子に廃品回収をさせていた源ジイに憤りいきどおを感じている。
- イ 亜希子は源ジイが息子を変えたかと思いい何も言わないが、真治は息子が源ジイと深く関わることを強い言い方で否定している。
- ウ 亜希子は息子が明るくなったのは源ジイによるものと考えているが、真治は息子が他人の世話をすることに抵抗感ていこうを抱いている。
- エ 亜希子は息子の面倒めんどうを見ていない自分に負い目を感じているが、真治は親としての自信を持ちその威厳を示そうとしている。
- オ 亜希子は息子が源ジイに会えたことを嬉しく思っているが、真治は他人である息子に世話を強要する源ジイを不快に思っている。

問五 傍線部③「十三歳というだけで、透明人間にでもなったような気がする」とありますが、この時の雄吾の気持ちを六十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「おれが勝ったら兄ちゃんはおれのいうことをきく」とありますが、「源ジイ」は雄吾にどのようなことを言おうとしたのですか。本文の言葉を使って三十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部⑤「泣きながら、老人を抱き起こし、車椅子に座らせる」とありますが、この時の雄吾の気持ちを理由も含めて説明しなさい。

問八 傍線部⑥「窓の外に広がるひとつひとつの建物に、それぞれの暮らしがあるのが不思議だった」とありますが、この描写を説明したものとしてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 雄吾が他の人もそれぞれに無理をしながら生きていることに思いをはせていることを示している。
- イ 雄吾が源ジイの大人になれという言葉を受け止めきれずに途方にくれていることを示している。
- ウ 雄吾が大人になるために無理をすることの苦労を痛感して嫌悪感を抱いていることを示している。
- エ 雄吾が自分の子供じみた行動を反省して大人としての振る舞いを身につけたことを示している。
- オ 雄吾が親のありがたさに気づいた後に見えた風景の違和感にとまどっていることを示している。

問九 本文の特徴を説明したものととして不適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア ときおり「老人」と言葉を用いて描写することで、「源ジイ」の客観的な姿や状況を伝えている。
- イ 「〜いる」などという現在を表す表現を文末に使うことで、その場の様子を生き生きと伝えている。
- ウ 夕日に染まった廊下を描くことで、その時の源ジイや雄吾の思いを印象的に表現している。
- エ 雄吾と源ジイの視点からそれぞれの状況を伝えることで、作品全体に奥行きを与えている。
- オ 「源ジイ」が無理して廊下を歩く様子を丁寧に描くことで、「源ジイ」の言葉に重みを与えている。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①「進みながら強くなる」がどういうことを意味しているかといえ、A、次のようなことではないかと思えます。

人間だれしも、いずれ十分に力を蓄たくわえて強くなったと確信してから進みたいと考えます。しかし、こうしたX主義でいくと、時間もかかるし、金もかかるのは当然です。それに、「よし、十分強くなったから、そろそろ進もうか」と決意する頃ころには、もう人生は終わってしまっていることが少なくないのです。

だったら、多少、②見切り発車の感があっても、とにかくスタートを切ろうじやないか。もちろん、前に進むからには多少は強くなっていなければならぬけれど、とにかく進むぞと決意して、試行錯誤しこうさくごしながら一歩ずつ前に足を出していくうちに、いつのまにか力がついてきて、スタートする前には③全然進めないと思っていた距離きよりも簡単に進めるようになっていく。実は、強くなったのは、とにかくスタートしなければならぬという至上命令があったからで、この至上命令を何とか果たそうと無茶苦茶に努力しているうちに、気がついたら強くなっていったということなのです。

B 言い換かえてしまうと、見切り発車の「すゝめ」ということになりましたが、これは、準備なしにいきなり始めようということでは決してありません。前もって準備することは十分に必要ですが、準備ばかりしていてスタートする決断がつかず、「いや、準備万端ばんたん整とつてからでないとやっぱいいけないだろう。そんなことをしたら、人からいいかげんな奴やつと言われて、恥はじをかく」と自分に④言い訳していると、永遠にスタートできない、ということなのです。

しかし、私のこの『進みながら強くなる』という本を読んで、「そうか、そういうことか、よしっ！」と決意を固めたとしても、やはり、⑤人間、そう簡単には見切り発車することができないものではありません。

⑥こんな時に、とても便利なのが、「……なので、仕方なく」というように、自分ではどうにもならない「なにごとか」を理由に使うことです。「本当はまだ準備が整っていなかったからスタートしたくなかったんだけど、人から無理強むりじいされて、あるいは周囲の状況じょうきょうからそうなってしまったので、仕方がないからスタートした」と⑦言い訳することです。実際、この私も、この「……なので、仕方なく」という形で物書きになった口なのです。

(中略)

スタートの決断がつかない時に、背中から自分を押しおしてくれる「……が……したから、仕方なく」という他発的動機たはつてきというのはとても有

益です。

実際、Y君が『ふらんす』編集部に連載<sup>れんさい</sup>の話を持っていくという「他発性」がなかったら、私が「自発的」に『馬車<sup>ばぐるま</sup>が買いたい!』のもとなる原稿<sup>げんこう</sup>を書き始めたとは思えません。⑧「他発性」が働いていたからこそ、「仕方なく」スタートを切ることにしたのです。というわけで、「進みながら強くなる」にしても、「……なので、仕方なく」という見切り発車のための他発的なきっかけは必要なのです。人間、悲しいかな、自分の意志でなにごとかを始めることはなかなかできないものなのです。

ところで、現実を観察してみると、この他発的動機<sup>どうき</sup>というのは、何かを「すること」ではなく、何かを「しないこと」のために使われるケースが非常に多いようです。つまり、これこれこういうことが妨<sup>さまた</sup>げになっているからスタートできないのだという、スタートの決断を下さない理由に使われてしまうのです。

確かに、人間、とくに日本人というのは進取的・前向きであるよりも保守的・現状維持<sup>げんじょういじ</sup>的で、何かしないこと<sup>こと</sup>の理由はいろいろと見つけてくるのですが、何かを決断する理由というのはなかなか見つけられないようにできてくるようです。C、こうした傾向<sup>けいこう</sup>が強いのが役所と大企業<sup>おほいきやう</sup>で、部下が上げてくるアイデアを片っ端<sup>ぺん</sup>から潰<sup>つぶ</sup>すのが自分の役目と信じている上役が少なくありません。

また、組織ではなく個人の場合でも、ダメの理由はいくらでも見つかります。そして、いつもいつもダメの理由ばかり見つけているうちに歳<sup>とし</sup>を取り、若いうちなら可能だったかもしれないアイデアも本当にダメになってしまふのです。

(鹿島茂<sup>かしましげる</sup>『進みながら強くなる——欲望<sup>ぼんねん</sup>道徳論』による)

(注1) Y君…『ふらんす』という雑誌で、筆者に連載を強くすすめた人物。

(注2) 『馬車が買いたい』…筆者の著作。

問一 傍線部①『進みながら強くなる』がどういうことを意味しているか」とありますが、どういうことを意味しているのですか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 見切り発車はいけませんが、何とかしようと必死にもがいているうちに、不思議と強くなっているということ。
- イ 見切り発車をするからこそ、どうにもならない状況に陥り、その中で必然的に自分が成長することになるということ。
- ウ 見切り発車ではあっても、何とかしようと必死にもがいているうちに、いつの間にか強くなっているということ。
- エ 見切り発車をする、必ずしもがき苦しむことになるが、予定通り自分を強くしてくれる利点もあるということ。
- オ 見切り発車をしてでも、自分を強くしなければならぬので、必死にもがくことは当然だし必要なことだということ。

問二 空欄A～Cに入る適語を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- ア あっさりと      イ とりわけ      ウ なぜなら      エ およそ      オ かえって

問三 空欄Xにはどの語句が入りますか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 相対      イ 絶対      ウ 自由      エ 経験      オ 完璧

問四 傍線部②「見切り発車」に必要なことを二点、本文中の漢字二字の語句で答えなさい。

問五 傍線部③「全然進めない」と思っていた距離も簡単に進めるようになってい」とありますが、なぜですか。三十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④⑦「言い訳」を筆者はどのように使い分けていますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア ④のような「言い訳」は時として構わないが、⑦のような場合はどのような「言い訳」もするべきではない。  
イ ④のような「言い訳」は日本人なら仕方ないが、⑦のような場合は無条件で「言い訳」するべきである。  
ウ ④のような「言い訳」は認めにくいだが、⑦のような場合もあまり「言い訳」しない方が望ましい。  
エ ④のような「言い訳」には否定的だが、⑦のような場合は積極的に「言い訳」するように勧められている。  
オ ④のような「言い訳」も認めてよいが、⑦のような場合ならむしろ「言い訳」していかなければならない。

問七 傍線部⑤「人間、そう簡単には見切り発車することができません」とありますが、その理由を三十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「こんな時　く　使うことです」とありますが、『なにごとか』を理由に使うことは、なぜ「とても便利」なのですか。五十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問九 傍線部⑧『他発性』が働いていたからこそ、『仕方なく』スタートを切ることにしたのです」とありますが、ここには筆者のどのような気持ちがかめられていますか。もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分一人ではその気になれなかった私に、無理にでも連載を書かせたY君に今では感謝している。  
イ 書く気が起きたらと準備していた私なので、Y君に先を越されたようで内心悔しく思っている。  
ウ いつかは連載を書こうと思っていた私の気持ちを無視して、無理に書かせたY君を憎んでいる。  
エ 将来は物書きになろうと思っていた私よりも、ずっと大きな野心を抱いていたY君にあきれている。  
オ なかなか決心できない私に、内緒で連載をすすめ書かせるように仕向けたY君の手腕に驚いている。

問十 筆者のもっとも言いたいことを、自分の言葉で五字以上十字以内で述べなさい。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① この動物のテンケイ的な行動だ。
- ② 藤原氏は平安時代のキゾクである。
- ③ ロクガしておいた番組を見る。
- ④ お父さんは一家のダイコクバシラだ。
- ⑤ 先生の指示にシタガう。

[問題はここまです。]



